

ヒロシマから世界平和の種

原爆に耐えた被爆樹木を平和活動に役立ててもらおうと、国連訓練調査研究所（ユニタール）広島事務所と広島市の市民団体が、種子や苗木を海外に届ける活動を本格化させている。被爆樹木の2世、3世がヒロシマから「平和の使者」として世界へ広がり、被爆地の願いを伝え、育てる取り組みとして注目される。

（杉山弥生子）

国連研究所とNPO活動本格化

原爆投下後、「75年間は草木が生えない」と言われた広島市。しかし、急速に復興を遂げ、市によると、アオギリやイチヨウ、クスノキなどの爆心地から半径約2キロ以内の55か所に約1万7千本の被爆樹木が現存する。同事務所の前所長で、イス人のナスリーン・アジミさん（53）が、市内に残る被爆樹木に着目。「言葉はなくても、生き証人として



被爆樹木のイチヨウの前で活動について語るナスリーン・アジミさん（左から3人目）と渡部さん（同4人目）ら（広島市中区）＝浜井幸幸撮影

被爆樹木「言葉はなくても生き証人」

被爆の実態を訴えることができる」と考えた。

平和活動を行うNPO法人「ANT-Hiroshima」代表理事の渡部朋子さん（58）や樹木医、広島市植物公園などの協力を受けて昨年7月、国際規模の活動につなげようと「グリーン・レガシー・ヒロシマ」と呼ばれる取り組みを始めた。

海外の政府関係者を研修生として受け入れるユニタールのネットワークを生かし、持ち帰ってもらったり、各国に種子を送ったりして育ててもらおう。1月から、ロシアとオランダ、南アフリカそれぞれの植物公園に縮景園（広島市中区）のイチヨウや、平和記念公園（同）のアオギリの種などを各計100粒以上送った。生育状況も報告してもらおう。

これまで個人レベルの活動はあったが、今回のような組織的な取り組みは初めてという。

アジミさんは「最悪の経験をしたヒロシマの木々の種子が被爆の惨状を思い起こさせる。核兵器廃絶への橋渡し役になれば」と期待する。渡部さんも「被爆樹木の種を愛情を持って育てることで、命や平和を大切に育む心を伝えたい」と話している。

29 March 2012, Yomiuri Shimbun
The seeds of World Peace from Hiroshima – Green Legacy Hiroshima Initiative has been working to spread them worldwide as “the Ambassadors of Peace”.